

礼拝空間 — 超越者と対峙する場の創造

第65回美術史学会全国大会 当番機関企画シンポジウム
2016年5月28日(土) 14:30—17:30 つくば国際会議場 大ホール

2016年5月27日(金)から29日(日)にかけて、筑波大学において第69回美術史学会全国大会が開催された。参加者は683人。プログラムは、三日間の研究発表のほか、27日に『美術史』論文賞表彰式および総会、28日にシンポジウムおよび懇親会を行った。会場は、27日と28日午前中は大学会館、28日午後と29日はつくば国際会議場を使用し、28日午前の研究発表の直後に参加いただいた会員を、チャーターバスで大学からつくばセンターへ誘導した。芸術系に設置された事務局が、準備と運営にあたったが、芸術系の学生の協力を得たほか、芸術学専攻のOB、OG多数に熱心な支援をいただいた。全ての日程を無事終了することができたことは、ひとえにこれらの方々のご協力の賜物であり、事務局にかかわった教員のひとりとして心から感謝したい。

当番校企画として、下記の要領により「礼拝空間—超越者と対峙する場の創造」と題するシンポジウムを開催した。3時間にわたる長丁場であったが、多数の来場を得て、東西文明の礼拝と美術という重量級の諸問題に関して、充実した内容の討議をしえた。それぞれの専門分野に関して、密度の濃い議論を提供して頂いたパネリスト諸氏に改めて感謝したい。以下に、長田と守屋の発表原稿を採録する。(長田)

趣旨

聖堂建築内の礼拝空間について、中世および近代のキリスト教会、仏教寺院、儒教聖堂の、それぞれの具体例に基づき考察する。本尊および建築内部装飾によって成り立つ内部空間は、美術史上の様々な問題を提示するが、祈りの場にどのような意味が与えられたのか、崇拜者に焦点を当てることで議論を収斂させる。

パネリスト

長田 年弘 (司会・筑波大学)
「趣旨説明」

木俣 元一 (名古屋大学)
「ゴシック聖堂の展示プログラム」

喜多崎 親 (成城大学)
「機能する様式—19世紀パリのサン＝ヴァンサン＝ド＝ポール聖堂を中心に」

長岡 龍作 (東北大学)
「仏教の礼拝空間—超越者との交感と美術」

守屋 正彦 (筑波大学)
「儀礼空間の表象—日本の孔子像の変遷について」

シンポジウム 趣旨説明

長田 年弘

はじめに

今日のシンポジウムでは、表題に掲げましたように、礼拝空間について、それぞれの専門の方にお話しをうかがっていきこうと思います。宗教的な行為としての、祈り、礼拝とその周囲に設計される空間について考えてみます。シンポジウム全体を貫く主題は、祈りの場に、いったいどのような意味が与えられていたかという問題です。

まず最初に、一般的な問題として、礼拝空間というものが、どのように定義されるかを考えてみます。まず基本的な要素として、祈りを捧げる者、つまり礼拝者がいて、その前にはおそらく非常に多くの場合にスーパーナチュラルな存在、つまり超越者の像があるだろうと思います。すなわち、礼拝の対象として、平面ないし立体によって表現された、たとえば神像あるいは仏像などです。あるいは、超越者の像そのものではなくとも、たとえば十字架とかあるいは曼荼羅のような、何等かの象徴的な表現である場合もあります。ともあれ、祈る者は、眼前にある超越者ないし何等かの対象物と対峙します。超越者に対して、礼拝をいわば捧げるという関係にあります。そしてその周囲に、礼拝空間が広がります。このように、礼拝者、超越者、礼拝空間という、三つの基本的な要素がまず考えられるだろうと思います。従って、礼拝空間のデザインのまさに中核を形づくっているのは、おそらく何よりも、礼拝者による祈りという行為そのものであると考えられます。

祈りは、超越者に対して、何等かの連絡、交流を持つためのひとつの手段です。宗教史家 Friedrich Heiler によれば、祈りは、諸宗教の中心に位置づけられ、その原初的形態は、超越者に対する願い、嘆願から始まったとされます¹。つまり、人は、欲求や恐れから超越者に対する請願の言葉を唱えました。不幸や危険からの救いを求めて、礼拝がなされたと考えられます。礼拝者の営む、祈りは、共同体が主体となって捧げられる、公の祈りである場合と、個人による私的な祈りである場合が想定されます²。いずれの場合も、礼拝者は、その捧げる祈りによって超越者との間に何等かのコミュニケーションを成立させます。このような交流によって、礼拝は、超越者をその場へ招来させたり現前させたりする働きをするように思われます³。

礼拝者が、祈りに没入することによって、周囲の空間には、しばしば特殊な意味が付与されます。たとえばその場が、天国であるとか浄土であるとか、空間に意味が与えられます。こうした意味付与は、本来、祈りによって与えられるものですが、空間デザインによって強化され具体化されるように思われます。言い方を変えれば、まず最初に、礼拝者の祈りという行為によって超越者が呼び起こされ招来され、空間に意味が与えられて、その

意味を体現したり、強化するために装飾が施されるわけです。礼拝空間のデザインは、このように基本的には、その場の意味付与の重要な手段のひとつとして成立するのではないかと思います。

1. 古代ギリシアにおける祈り

ではこうした図式については、またあとで参照することにして、最初に、祈りの実際の例を見てみようと思います。祈りの、たいへん素朴な例です。詩編『イリアス』の冒頭には、古代ギリシア人の祈りの典型として、しばしば引用される場面があります⁴。娘を奪われた老父が、敵に対する復讐を神に祈り、神がそれに応えて現れるというたいへん劇的な場面です。トロイアの神官クリュセスは、ギリシア方の総大将アガメムノンによって娘、クリュセイスを捕らえられ、戦利品とされてしまいます。父親は、娘の身柄を引き取るべく、敵陣を訪れ総大将アガメムノンに嘆願します。捕われの娘を返してくれと泣いて願うわけです。しかしアガメムノンは、老人を罵ります。「お前の娘は夜伽をつとめ、死ぬまで故郷（ふるさと）を離れて暮らすことになる」と罵詈雑言を投げつけます⁵。敵のテントから追い出された神官クリュセスは、アポロン神に祈ります。

こういうと老人は脅えて、いわれるままに従った。浪騒ぐ浜の渚を黙々として歩んで行ったが、やがて人氣（ひとけ）のない辺りにたどりつくと、髪美（うる）わしいレトが産んだアポロンに心を籠めて祈るには、

「お聞きください銀（しろがね）の弓持たす君、クリュセならびに聖地キラの守り神、さらにはテネドスを猛（たけ）き力に続べ給うスミンテウスよ、かつてわたくしがあなたのために御心に叶う社（やしろ）を築きまいらせ、また牛、山羊の肥えた腿（もも）を焼いてお供えしましたことをお忘れなくば、このわたくしの望みを叶えて下さいませ。どうかあなたの弓矢によってダナオイ勢に、わたくしの流した涙の償いを払わせてやって下さいませ。」

こう祈っていると、ポイボス・アポロンはその願いを聴き、心中怒りに燃えつつ、弓とともに堅固な覆いを施した矢筒を肩に、オリュンポスの峰を降る。怒れる神の肩の上では、動きにつれて矢がカラカラと鳴り、降りゆく神の姿は夜の闇の如くに見えた。やがて船の陣から離れて腰を据え一矢を放てば、銀の弓から凄まじい響きが起る。始めは驃馬と俊足の犬どもとを襲ったが、ついで兵士らを狙い、鋭い矢を放って射ちに射つ。かくして亡骸を焼く火はひきもきらず燃え続けた⁶。

参考として、図1に、イリアスの場面ではなくて別の主題ですが、弓を射るアポロンの表現を掲げます。レト女神を侮った傲慢な母親ニオベを罰するために、レトの子アポロンとアルテミスがニオベの子供たち（ニオビデ）を射殺する場面です⁷。

さて、クリュセスの言葉は、古代の祈りの標準的なケースとして知られています⁸。古代ギリシア、ローマ宗教においては、厳格な意味での祈りの定型文は存在しませんが、共通のパターンが見られます⁹。祈りは、通常、三つの要素から成り立っていたとされます。まず第一の要素として、祈りは神への呼びかけと共に始まります。つまり、どの神に対して祈るのかを特定して名指しするわけです¹⁰。これは主には、古代世界が多神教だったことに関わります。また祈りは、「聖地キラの守り神」など、しばしば神の居場所に言及します。キリスト教の、いわゆる主の祈りにおいても、「天にましますわれらの父よ」と、神の居場所が触れられていることが思い起こされます。

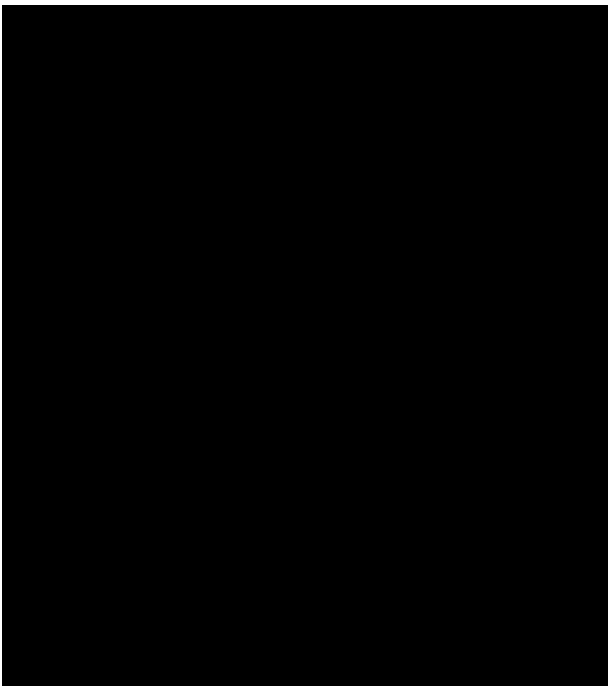


図1. 罍型クラテル。Louvre G341.

第二の部分として、祈る者と神とのこれまでの関係について言及がなされます。つまり、崇拜者は、彼がなぜ神の好意を期待しうるのか、その根拠を示すわけです。クリュセスは、自分がかつて神のために社を築き、犠牲をささげたと、これまでの事績を挙げて、神の慈悲や親切を自分が望みうる者であることを示します。簡単に言えば、今までにこれだけのことをしたのだから、どうか恵みを与えてくださいと訴えるわけです¹¹。

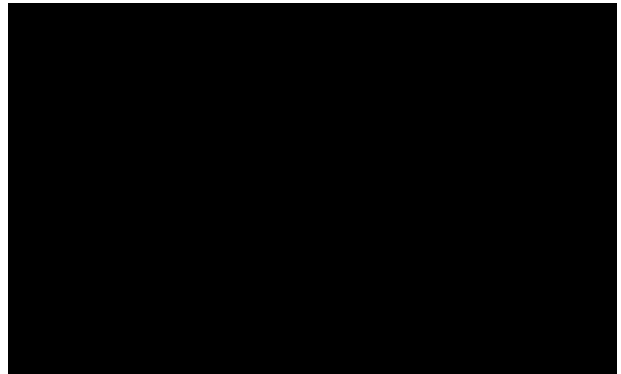


図2. アッティカ赤像式スキュフォス。Varsovie, Mus. Nat. 142464 (41).

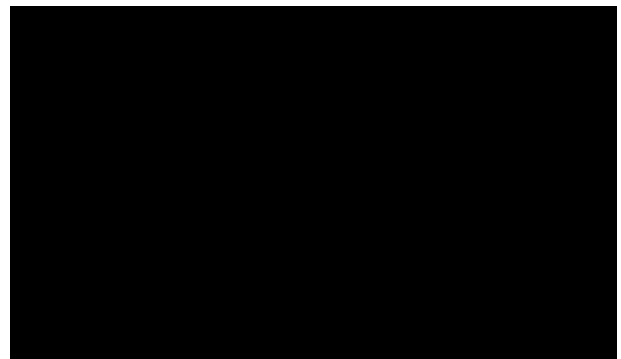


図3. (図2のスキュフォスの反対面)

そして、最後に、三つめに、本題としての嘆願が開陳されます。クリュセスの望みは、自身と娘を破滅させた敵に対する復讐でした。また、嘆願は、しばしば誓い、誓約を伴います。つまり、もしこの祈りが成就するなら、いついつまでにこれこれのことをしようと、崇拜者は超越者に対して申し出ます。神が嘆願に応じてくれた暁には、たとえば、羊1頭を捧げますとか、あるいは、神域に彫像を建立しますといった誓いが祈りの定型には見られます¹²。

2. 礼拝の儀式

さて、このシンポジウムでは、礼拝空間について、各時代に関して考えていきます。古代宗教において、礼拝空間は、中世以降のキリスト教や仏教とはひとつの点が明確に異なっています。というのも、ギリシアローマの宗教においては、ほとんどの場合、祈りは犠牲の奉納を伴っていたからです。祈りは、従って、屋外で捧げるもので建築の中ではありませんでした。

図2は、犠牲獣を屠殺する場面、図3は祭壇上でその肉を焼く場面です。神々に対する崇拜は、祭壇において牛、羊、豚等の犠牲獣を屠殺して、骨、内臓、肉を焼きました¹³。祭壇というものは、基本的には、動物を屠って

薪を燃やして肉を焼く場所でした¹⁴。図4では左の少年が肉を焼いています。一方、神官はもうひとりの少年と共に、酒を垂らして、献酒をしています。（この作例では、珍しく、右端のアポロンが人々の礼拝を見物している様子が表されています¹⁵。つまり、対象となる神が、自分自身に捧げられた神事を見学する様子が表現されています。）ギリシア美術では、祭壇は必ず血のシミが付着した様子で表現されます¹⁶。祭壇は血で染められていなければならないとする宗教上の掟が背景にあったと推定されています（図5,6）¹⁷。

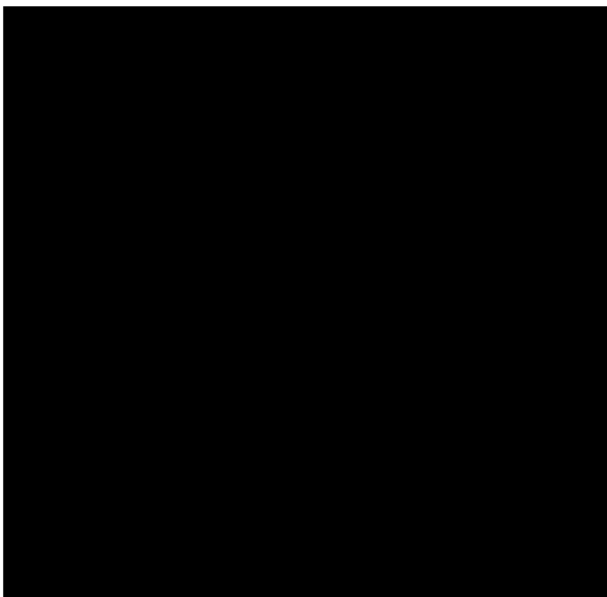


図4. アッティカ赤像式鐘型クラテル。Paris, Louvre Museum No. CA 307 (G 496).

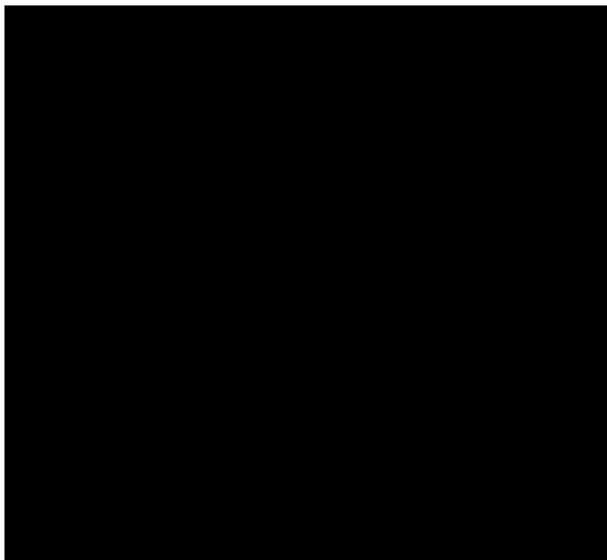


図5. アッティカ赤像式キュリクス。Paris, Louvre Museum G 112.

では、古代において、神殿がどのような役割を果たしたのかということ、ギリシアローマにおける神殿は、何よりも神の家と見なされていたと考えられます。神殿は、信徒の集まる集会所として機能したのではなく、儀式も説教も、建築内では行われませんでした。礼拝は、神殿の外の東側で行われます。そのため、神殿は、祭壇と必ずセットにして建立されます¹⁸。

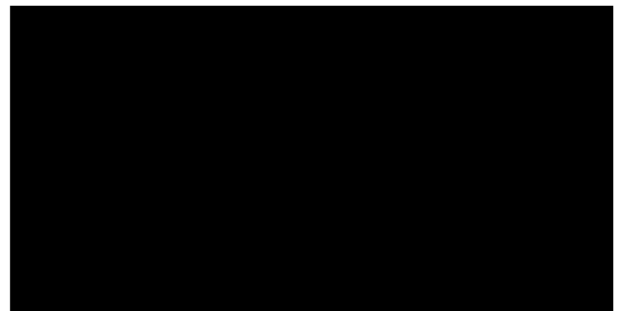


図6. 奉納絵馬（ピナクス）。Athens, National Museum 16464.

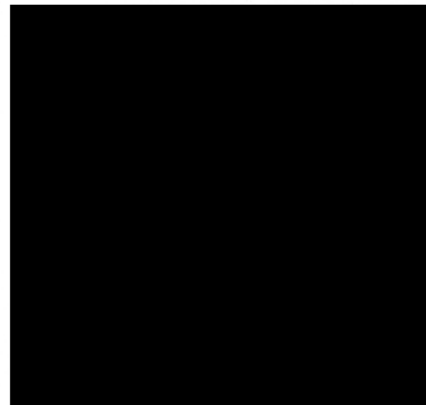


図7. プリエネ、アテナ・ポリアス神殿と祭壇（復元図）。

神殿は、東正面に祭壇を備えています。これは、神殿正面の扉を開けて、中にある本尊が人々の礼拝を見ることができるよう想定されていたためであろうと研究者によって推定されています¹⁹。つまり、犠牲式は、神殿に住まう神に見せるために行ったものでした。図7は、プリエネのアテナ・ポリアス神殿と祭壇を示す復元図です²⁰。

フェラーラの陶器画（図8）の場合は、神殿内にアポロンの神像が座り、市民が礼拝のための行列を作る様子を表しています²¹。さて、これまでの説明でもおわかり頂けるように、古代宗教においては、神と人との間の、いわゆる互酬的な関係が強く現れています。互酬的というのは、つまりギブアンドテイクです。人は神に対して、犠牲や奉納物を捧げ、超越者との間に獣の殺害や奉納物を介して交流、連絡を結びます。その見返りとして、

神が人に対して恵みを返すと考えられていました²²。一般に、多神教の神々には擬人的な性格が強く、多くの一神教に見られる超越的で絶対的な神の性格は希薄といえます。神々は、いわば、人間よりもひとつ上の階級に属する、ある種族と見なされていたとすることができます。

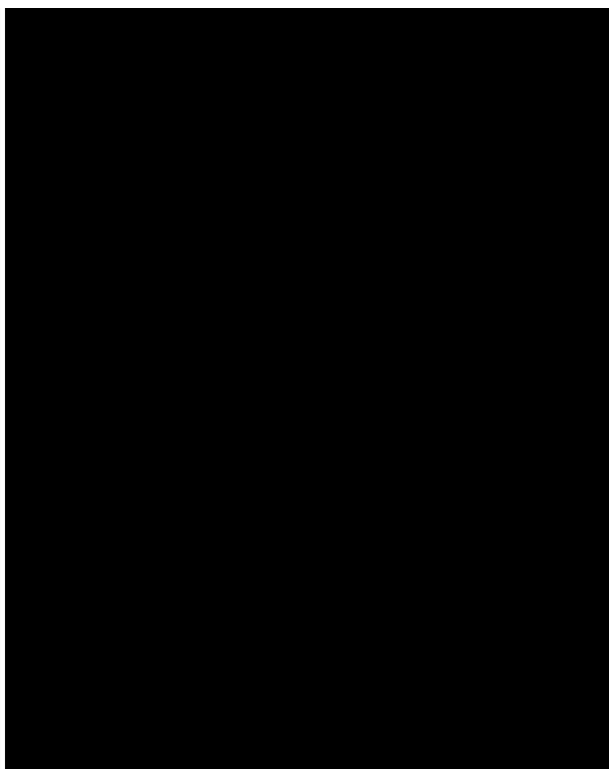


図8. アッティカ式赤像渦巻クラテル。Ferrara, Museo Nazionale 44894 (T 57 C VP).

宗教史家の Kearns が指摘するように、今日の多数の宗教に見られる、超越的な存在に対する完全な依存と絶対的な服従の感情、つまり日本語で一言で帰依と呼ぶような宗教的感情は、ギリシア、ローマ宗教には相対的に希薄であったとされます²³。さて、これから、専門の先生方の発表によって、中世以降のキリスト教と仏教、儒教の礼拝空間について考えていくことにします。

3. 礼拝空間の創造

中世以降においては、動物犠牲という屋外の儀式はその役割を終え、変わって、宗教建築の内部の、本尊の面前における信徒の心理と行動が礼拝において重要になってきます。屋内における、対面する超越者の像と人との間の直接のコミュニケーションが問題になると言えるでしょう。西洋の場合でいえば、唯一神に対する、祈る者の完全な依存と帰依という関係は、室内空間における礼拝という状況の設定に象徴的に現れているように思わ

れます。つまり、礼拝者は、もはや戸外ではなく、室内で、唯一の超越者と対峙するのですが、彼のいる場所はまさしく超越者の住まう家の内部になります。崇拜者はつまり、神に保護され、直接的な力の及ぶ領域に包み込まれて礼拝を行うようになります。ある意味では、信者の完全な依存の感情は、室内という状況設定に象徴的に現れていると言いうるでしょう。

こうした、室内における礼拝という新たなシチュエーションに対応して、空間設計が模索されるようになったのではないかと考えられます。祈る者は、建築内において、超越者の前に自身を無にして帰依するわけですが、こうした新しいシチュエーションが、教会内の装飾による空間デザインを模索させたのではないかと予想されます。

いずれにせよ、礼拝空間が意味を帯びるのは、祈り、礼拝という行為によってであったように思われます。礼拝者は、祈りに没頭することによって超越者と直接のコミュニケーションへ導かれます。祈りに没入するがゆえに、礼拝者は周囲の空間に彼自身の思い描く世界を投影することになるのではないのでしょうか。空間はこうして変貌するのですが、これは礼拝者の祈りが、いわばプロジェクターの役割を果たすからといってよいとも思われます。シンポジウムの企画として、最初に礼拝空間という主題を考えたのですが、この課題は、東西の多様な宗教を扱うので、トピックが多岐にわたることが予想されました。つまり、問題が拡散することが懸念されたわけです。そこで、パネリストの先生方にあるお願いをしました。

それぞれのお話の結びにおいて、共通のテーマについて言及して頂ければとお願いをしたわけです。「礼拝する者の脳裏において、その場がどのような空間として把握されるように設計されていたのか」という点について、簡単に宜しいので触れて頂ければとお知らせしました。礼拝者によって体験されたデザインを、焦点にできればと思います。「祈る者にとっての空間の意味」を、共通の鍵として、後のディスカッションに結び付けることができると考えています。では、聴衆のひとりとして、発表をたいへん楽しみにしています。

文献略号

下記以外の文献については、American Journal of Archaeology の定める文献略号を使用する。
(<http://www.ajaonline.org/submissions/standard-reference>)
2016.12.24.

Berve, H. and Gruben, G. 1963. *Greek Temples Theatres and Shrines*. New York: Thames and Hudson. (tr. R. Waterhouse)

Borgers, O. 2008. "Religious Citizenship in Classical Athens. Men and

- Women in Religious Representations on Athenian Vase-painting.” *BABesch* 83: 73–97.
- Bremmer, J.N. 2007. “Greek Normative Animal Sacrifice.” In *A Companion to Greek Religion*, edited by D. Ogden, 132-144. Malden, Oxford and Victoria: Blackwell Publishing.
- Burkert, W. 1985. *Greek Religion*. Translated by J. Raffan. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Connelly, J.B. 2007. *Portrait of a Priestess. Women and Ritual in Ancient Greece*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Dillon, M. 2002. *Girls and Women in Classical Greek Religion*. London and New York: Routledge.
- Furley, W.D. 2007. “Prayers and Hymns.” In *A Companion to Greek Religion*, edited by D. Ogden, 117–131. Malden, Oxford and Victoria: Blackwell Publishing.
- Gebauer, J. 2002. *Pompe und Thysia. Attische Tieropferdarstellungen auf schwarz- und rotfigurigen Vasen*. Münster: UGARIT-Verlag.
- Heiler, F. 1920. *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religionspsychologische Untersuchung*. München: E. Reinhardt.
- Heiler, F. 1961. *Erscheinungsformen und Wesen der Religion*. Stuttgart: W. Kohlhammer.
- Jim, Th.S.F. 2014. *Sharing with the Gods. Aparchai and Dekatai in Ancient Greece*. Oxford: Oxford University Press.
- Jones, M.W. 2014. *Origins of Classical Architecture: Architecture Temples, Orders and Gifts to the Gods in Ancient Greece*. New Haven and London: Yale University Press.
- Kaltsas, N. and Shapiro, A., eds., *Worshipping Women. Ritual and Reality in Classical Athens*. New York: Alexander S. Onasis Public Foundation.
- Karoglou, K. 2010. *Attic Pinakes. Votive Images in Clay*. Oxford: Publishers of British Archaeological Reports.
- Kearns, E. 2010. *Ancient Greek Religion: A Sourcebook*. Malden, MA/Chichester/Oxford: Wiley-Blackwell.
- Keesling, C.M. 2003. *The Votive Statues of the Athenian Acropolis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Larson, J. 2007. *Ancient Greek Cults: A Guide*. Routledge London and New York: Routledge.
- Lee, M.M. 2015. *Body, Dress, and Identity in Ancient Greece*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Naiden, F.S. 2015. *Smoke Signals for the Gods. Ancient Greek Sacrifice from the Archaic through Roman Periods*. Oxford: Oxford University Press.
- Neils, J. 2001. *The Parthenon Frieze*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Parke, H.W. 1977. *Festivals of the Athenians*. London: Thames and Hudson.
- Roccos, L.J. 1995. “The Kanephoros and Her Festival Mantle in Greek Art.” *AJA* 99: 641–666.
- Simon, E. 1976. *Die Griechischen Vasen*. München: Hirmer Verlag.
- Stasinopoulou-Kakarouga, E. 2008. “no. 101: Pinax (copy by Gillieron).” In *Worshipping Women. Ritual and Reality in Classical Athens*, edited by N. Kaltsas and A. Shapiro, 225. New York: Alexander S. Onasis Public Foundation.
- Van Straten, F.T. 1995. *Hiera Kala. Images of Animal Sacrifice in Archaic and Classical Greece*. Religions in the Graeco-Roman World, vol. 127. Leiden, New York, Köln: E.J. Brill.
- 古野清人 1971. 『原始宗教の構造と機能』有隣堂出版。
- 脇本平也 1997. 『宗教学入門』講談社。

-
- (1) Heiler 1920; Heiler 1961; Kearns 2010, 89. 宗教学においては、原始的な祈りや呪術的な効果を有する儀礼的な祈りが、哲学、思想によって倫理化、合理化され祈りの形態が成立したとされる。ただし、祈りは、諸宗教の核心にあるとはいえ、全ての宗教が祈る対象としての神を措定するわけではない。キリスト教やイスラームなどの有神宗教に対して、たとえば仏教は無神宗教と解され、字義通りの神に対する祈りは実践されない。
- (2) 古野 1971; 脇本 1997.
- (3) 崇拜者は、しばしば神の居住する領域、すなわち神域に自身の身を運び、祈りによって神に接近する。神域において人は、浄化の規律、あるいは言葉と行動による何らかの特殊な形式を実践し、人と人との間の活動を離れた領域に入る。反対に、神自身が崇拜者に接近することもある。たとえば、聖なる夢や、顕現である。Kearns 2010, 88-94, esp. 88-89.
- (4) Kearns 2010, 90-91; Burkert 1985, 74.
- (5) ホメロス『イリアス』1, 22-32. (松平千秋訳)
- (6) ホメロス『イリアス』1, 33-52 (松平千秋訳)
- (7) 壺型クラテル Louvre G341: ARV² 601, 22; Par 395; Simon 1976, 133-135, pl. 193.
- (8) Furley 2007は、古代ギリシアにおける祈りはcharisをどの程度有するかによって数種類に分類されうると見なす。すなわち、charisをある程度有する場合と、ヒケテイア(嘆願)のようにcharisを持たずに全面的に相手にゆだねる場合などである。
- (9) Parke 1977, 20-22; Kearns 2010, 89. 本論で述べる祈りの基礎的なパターンは、Burkert 1985, 74の記述を参考にした。なお、古代ギリシア、ローマにおいては、祈りは基本的に自由になされ、厳格な定型文は全く存在しなかった。この事実は、Burkertが論じるように、神人同型論 anthropomorphismに関わると思われる。
- (10) 神々への祈りは、「お聞きください」という神格に対する呼びかけによって始まる。その際、添え名 epithets が特に重要であった。添え名は、神自身が好むと見なされたものが選ばれた。「お望みになるどのような名前であれ」LSCG

155, Asclepieion on Kos; *LSCG* 88, Olbia.)

- (11) 祈りにおいては、人は神に援助を訴えるが、その根拠は過去に崇拜者が神のために何かをしたという点に求められる。あるいはまた、崇拜者がではなく、神自身が過去に崇拜者に対して何かをしたという事実も、崇拜者による祈りの根拠になりうる。なぜなら、これらいずれの事例においても、両者の間にcharis関係が築かれているからである。神が、もし、祈りと捧げ物をする者を援助しないなら、神の評判は傷つきうるために、charis 関係は祈りの根拠となる。ある意味では、崇拜者は、祈りによって神にそのこと（不評判の危険）を示唆していると解することができる。Kearns 2010, 90 は、こうした神と人の関係について、ある男性が自身のものを保護しない場合に彼が周囲から尊敬されないのと同様であると説明する。
- (12) Kearns 2010, 89; Burkert 1985, 75. *ThesCRA* 1:270–281, esp. 275, 280 s.v. “2.d. Dedications, Gr.” (R. Parker) が論じるように、古代ギリシアの神域における奉納物は、祈りの際の誓いを契機としていたと推定される。Keesling 2003, 4–10, esp. 4もまた、奉納が多くの場合に祈りの際の誓約に由来していたと見なす。古代文献は、祈りの後に犠牲を捧げ、最後に奉納物を捧げる事例を伝えている。Herodas 4; *ThesCRA* 1:279–280, s.v. “2.d. Dedications, Gr.” (R. Parker). Keesling 2003, 199は、奉納の機会について、二つの用語を用いて説明する。すなわち、奉納物は神々を喜ばせる贈り物としての *agalma* function を有すると共に、奉納者の記念としての *mnema* function をも有したとされる。
- (13) アッティカ赤像式スキュフォス。Varsovie, *Mus. Nat.* 142464 (41): *ARV*² 797, 142; *ThesCRA* 1: 125, no. 543, pl. 30, s.v. “2.a. Sacrifices, Gr.” (A. Hermary and M. Leguilloux). 古代ギリシアの犠牲式の手順については Bremmer 2007も参照。
- (14) Kearns 2010, 212–223; Burkert 1985, 59–64.
- (15) アッティカ赤像式鐘型クラテル。Paris, Louvre Museum No. CA 307 (G 496): Van Straten 1995, 143–4, 158, 231, V200, fig. 152; Gebauer 2002, 406–7, B43, fig. 268; Kearns 2010, fig. 10; *LIMC* 2:298, no. 954, s.v. “Apollon” (W. Lambrinudakis).
- (16) 祭壇は血で汚れていることが大切であった。Bremmer 2007, 136–136.
- (17) アッティカ赤像式キュリクス。Paris, Louvre Museum G 112: *ARV*² 117, 7; Van Straten 1995, 220, V147, fig. 110; Gebauer 2002, 259–261, S2, fig. 135; *ThesCRA* 1: 117, no. 487, pl. 28, s.v. “2.a. Sacrifices, Gr.” (A. Hermary and M. Leguilloux). 奉納絵馬（ピナクス）。Athens, National Museum 16464 (wooden pinakes): Hausmann 1960, 15–16, fig. 4; *ThesCRA* 1:15–16, no. 97, s.v. “1. Processions, Gr.” (M. True, J. Daehner, J.B. Grossman, K.D.S. Lapatin); *EAA* 6, 201–204 s.v. Pitsa, ill.; Van Straten 1995, 57–58, fig. 56; Roccas 1995, 651–2, fig. 8; Dillon 2002, 228, fig. 7.3; Connelly 2007, 170–1, fig. 6.3; Stasinopoulou-Kakarouga 2008, 225, fig. 101; Karoglou 2010, 9, fig. 1.

- (18) Parke 1977, 20. 史料によれば、一般に、神殿は祭り以外の時は施錠されていたと思われる。こうした慣習は、キリスト教会が信者のために常に建物を開放しているのと対照的である。ホメロスなど多くの文献が伝えるように、古代において人は祈りたい時に祈りえたと思われる。しかし、私的な礼拝のために人が建物に入るという習慣は、証言には全く残されていない。祈りの適切な場所は、一般に戸外の祭壇と彫像の前であったと考えられる。
- (19) Jones 2014, 22.
- (20) Berve and Gruben 1963, fig. 140.
- (21) アッティカ式赤像渦巻クラテル。Ferrara, Museo Nazionale 44894 (T 57 C VP): *ARV*² 1143, 1; Van Straten 1995, 20–21, V78, fig. 13; Neils 2001, fig. 149; Gebauer 2002, 106–9, 174, 176, 184, 210, 478, 506, P58, fig. 57–58; *LIMC* 2:220, no. 303, s.v. “Apollon” (W. Lambrinudakis); *ThesCRA* 1: no. 52 s.v. “1. Greek Processions, Gr.” (M. True, J. Daehner, J.B. Grossman, K.D.S. Lapatin); Borgers 2008, 93 n. 14; Lee 2015, 202, fig. 7.2.
- (22) 古代ギリシア宗教の互酬的關係については右記を参照。Burkert 1985, 93; *ThesCRA* 1:280, s.v. “2.d. Dedications, Gr.” (R. Parker); Larson 2007, 8–9; Kearns 2010, esp. 264–275; Naiden 2013, esp. 39–130; Keesling 2003, 6–10. Jim 2014, 59–97, esp. 65–67, 76は、人と神との間の互酬關係が先行研究においてしばしばあまりに単純化されていると批判する。彼女によれば、現代の研究者は、ギリシア宗教の性質が我々の抱く宗教観と根本的に異なる点を強調しすぎるという。
- (23) Kearns 2010, 89.

挿図典拠

- 図1. 萇型クラテル。Louvre G341. Simon 1976, 133–135, pl. 193.
- 図2, 3. アッティカ赤像式スキュフォス。Varsovie, *Mus. Nat.* 142464 (41). *ThesCRA* 1: 125, no. 543, pl. 30, s.v. “2.a. Sacrifices, Gr.” (A. Hermary and M. Leguilloux).
- 図4. アッティカ赤像式鐘型クラテル。Paris, Louvre Museum No. CA 307 (G 496). Kearns 2010, fig. 10.
- 図5. アッティカ赤像式キュリクス。Paris, Louvre Museum G 112. *ThesCRA* 1: 117, no. 487, pl. 28, s.v. “2.a. Sacrifices, Gr.” (A. Hermary and M. Leguilloux).
- 図6. 奉納絵馬（ピナクス）。Athens, National Museum 16464 (wooden pinakes). Kaltsas and A. Shapiro 2008, fig. 101.
- 図7. プリエネ、アテナ・ポリアス神殿と祭壇（復元図）。Berve and Gruben 1963, fig. 140.
- 図8. アッティカ式赤像渦巻クラテル。Ferrara, Museo Nazionale 44894 (T 57 C VP). Neils 2001, fig. 149.

(おさだ としひろ)